

はじめに

校長 東田 都美

「教育は人なり」、私は、このことを常に念頭において学校経営を行っています。また、「教師は授業で勝負する」ということを基本としています。最近では人工知能により一人一人の習熟に合わせてプログラムを組み学習していくことも実践されるようになりました。時代が急速に進歩する中ですが、小学校という児童が集う学びの場では、「人が人を繋ぎ導く」ということに、まだまだAIでは成し遂げられない価値があることを信じ、その価値を成果につなげていきたいと強く感じるこの頃です。

さて、先日、大田区教育研究会から今年度の研究紀要（研究奨励応募論文）が届きました。本校からは「池上地区における第3学年社会科の地域教材開発～外部連携に関するOJTの事例として～」というテーマで、3名の担任の共同研究が掲載されました。日頃の実践を自主的にまとめ、他校の教職員にも共有することで役立てていければという心意気をととても嬉しく頼もしく感じました。この紀要の1ページ目には、大田区教育委員会指導課長 細田 真司様の「挨拶」が掲載されています。その中の言葉を、引用し紹介します。

「子どもの意欲を引き出し、主体的に学び続ける力を育み、ICTの活用を通して子どもの脂質・能力を最大限に育成するために『学び続ける教師』としての姿が問われています。学び続ける教師とは、自分のもつ知識や技能を更新し、教育の質を向上させるために、自律的かつ主体的に研究や修養に励む教師であると考えます。また、学び続ける教師は、時代の変化に対応できるだけでなく、子どもの主体的な学びを支援する伴走者としての能力を持ち合わせる必要があると考えます。さらに、学び続ける教師には、自分の置かれた状況に応じて、授業者としての立場のときだけでなく、教員研修等の学習者としての立場においても、個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実を図ろうとする態度があると考えます。そして、そのような先生には、主体的・対話的で深い学びの実現に向けて、明日からの授業改善につながる視点を自ら見いだそうとする姿があると考えます。学び続ける教師は、子どもたちにとって重要なロールモデルであり、教師としての専門性の向上に寄与するものです。」

上記の文章を拝読し、真っ先に思い浮かんだのは、本校の教職員の「授業改善への前向きな態度と組織としての協働体制」です。今年度は、大規模な必異動の年となり、教職員の半数以上が入れ替わりました。当初は昨年度の研究の継続を心配しました。しかし、それは杞憂に終わりました。むしろ年度当初に丁寧に昨年度の成果と課題を整理し、問題解決型の授業展開や言語活動の重視、ノート指導などと1年生から6年生、特別支援学級、専科に至る全教職員で共通理解とし実践を打ち合わせたことで、組織として研究が地についたものとなったと感じます。研究推進委員長は常に組織全体に目を配り、率先して「研究は楽しい」という明るい雰囲気、本校の研究を推進してくれました。推進委員会や分科会では、常に児童の実態と目指す児童像、育てたい児童の力の両面からアプローチした話し合いを行いました。」

特別支援学級の授業では、一人一人の習熟度が違う中、学年の枠を超えて授業を構成し、スモールステップで児童の実態を確認しながら授業を進めていました。丁寧にフィードバックし、児童が安心して自信をもって授業に臨んでいる姿は、通常学級の教員に、個別最適化と協働的な学びの貴重なモデルを示してくれました。講師の先生からは算数科の専門的な内容や指導を学ぶことができ、特別支援学級の指導を通常学級で生かすヒントをたくさん学ぶことができました。

2年生の授業では、児童に学ぶ意欲や必要感をもたせるためには・・・と考え、教科書とは異なる展開について検討を重ねました。何度も指導案を検討する中で行き詰まったとき、講師の先生が電話やメールでやり取りするよりは・・・と急遽ご来校くださり、ご自身が所属されている算数の専門的な研究会で実践された指導事例をご紹介くださり本校の児童の実態に合わせてアレンジする方法をご示唆くださいました。ICTの活用についても教員の意見から価値を見出しご助言くださいました。

4年生の研究授業では、授業者が「協議会で授業展開の工夫を具体的に学べ、講師の先生から教科書にはない児童がノリそうな面白い教材を紹介してもらえました。もう一回、授業をしてリベンジしたいです!」と授業後に校長室に目を輝かせて言いに来ました。研究授業は学習規律のある落ち着いた和感をもたらしましたが、よりよい授業を目指す姿に心打たれました。ちなみに、このリベンジは他学級の授業で実践されました。

6年生の研究授業では、実物を操作する体験を通して知識の定着を図るために、日常生活で活用されている「てこ」に関する実物をたくさん準備しました。事務員や用務員も協力して実物を集めました。受験勉強などで先行知識のある児童も実物を手にして、ユニバーサルデザインのよりよい道具を考えることで、知識を活かして活用できる場を設けました。

結びとなりますが、今年度の本校の研究を導き、価値付け、授業改善の道標を示してくださった、大田区教育委員会 ICT 教育専門員の茂呂 美恵子先生と文京学院大学人間学部児童発達課特任教授の森田和良先生に厚く御礼申し上げます。講師の先生方の親身な御指導と御教示のおかげで、本校の教職員一同が、「子供たちのために、よりよい授業をしたい」という熱い思いで、授業研究の楽しさとよい授業を目指すことの醍醐味を感じることができました。本当にどうもありがとうございました。